知らない“ひと”の話を

小鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
知らない“ひと”の話を

【Ｎコード】
Ｎ２９３０Ｔ

【作者名】
小鶴

【あらすじ】
“ひと”について。いろいろなひとがいるのだということを、この話で書いていけたらいいなと思っています。オムニバス形式なので一話一話が独立した形となりますが、けれども前の話とどこかでつながっているものです。
普通の連載小説ではないと思いますので悪しからず。

1　叫ぶひと

小さいころ、斜め向かいに住むおばちゃんにうるさいと怒られるのが好きだった。僕はいつも怒られるために大声を張り上げた。

世界の裏側にいるひとがどうかもっていた愛の花束を落としますようにと、月に生きるひとたちが地球からのメッセージだと勘違いしますようにと、幼心にちょっと気障なことを考えながら一生懸命に願って叫んだ。

僕の声にみんな驚いたと思う。月までは届いていないだろうけれど、少なくとも僕の家の周りに住んでいる人は驚いて、そしておばちゃんが驚いたひとの代表としていつも僕に怒りに来た。僕はそれが嬉しかった。僕は毎日、喉が痛くなるまで声を出した。おばちゃんが怒りに来ることだけが僕の楽しみだった。

今から考えるとおばちゃんはどうして僕が叫ぶのか知っていたのだと思う。だっておばちゃんは怒ったあとにいつも、僕にまん丸の飴玉をくれた。カラフルな色で、甘くておいしかった。そしておばちゃんは僕を立派なソファーに座らせて、おばちゃんは床の上にじかに座って、僕に本を読んでくれた。

すると僕は叫ぶのを止めて、いつの間にかおばちゃんの横に座って、おばちゃんの腕をつかんで、おばちゃんの読んでくれる本の内容に聞き入った。おばちゃんが本を読み終わった時、いつの間にか飴玉は口から消えていて、僕は喉の渇きを覚えて、キッチンまで飲み物を取りに走った。僕はいつもおばちゃんに飲むかと聞いた。け

れどおばちゃんは決まって飲まないよ、ありがとうと言った。おばちゃんのほうが沢山話して喉が渇いているはずなのに、おばちゃんが僕のうちで何かを口に入れることは最後までなかった。

僕がコップ一杯の液体を飲み終わるのをおばちゃんは笑いながら眺めて、飲み終わると僕を洗面所まで連れて行った。そして僕は歯を磨かされた。歯を磨くのは決して好きとはいえない行為だったけれど、おばちゃんがいるときは好きになれた。

おばちゃんは僕の歯を歌いながら磨いてくれた。そして歯を磨き終わるとおばちゃんは僕の頭をぐりぐりとなでて、ニカッと笑って、もううるさくするんじゃないよと言って自分のうちに帰っていった。

僕はおばちゃんにもっといてほしいとおもっていたけれど、前に一度そう言ったときに見たおばちゃんの困ったような笑顔を見て、それっきり言わないことにしていた。

ある日、おばちゃんはうちに来てくれなかった。いつもは叫び始めて五分くらいで、飴玉と本をつかんでサンダルで走ってきてくれるおばちゃんは、五分叫んでも十分叫んでも、僕のうちに来なかった。十五分たつかというときに、右隣の家に住むおじちゃんが僕に怒鳴りに来た。

うるせえぞ、この糞餓鬼、そういわれて僕は泣いた。誰かに怒られて泣くなんて、初めてだった。

とうとうその日、おばちゃんは来なかった。次の日も、おばちゃんの代わりにおじちゃんが来た。いい加減にしやがれ、なに考えてやがるんだ、おじちゃんはそういって、僕の頭を拳骨で殴った。ひとに殴られるのも、初めてだった。目の周りがチカチカした。その場に崩れ落ちて、しばらくは立ち上がれなかった。また涙が出た。

僕はおばちゃんに会いたくなった。会って、どうしてうちに来てくれないのか聞こうと思った。僕のことを、怒るのが嫌になってしまったのかと不安になった。おばちゃんがまた来てくれるならもうるさくしないと約束しようと思った。斜め向かいのうちに、僕は走った。

サンダルで走ったせいで、一度こけて膝小僧をすりむいた。けれどそんなことは関係無しに、僕は斜め向かいのうちの庭に飛び込んだ。

飛び込んだ後、僕は一瞬家を間違えたかと思った。おばちゃんの家の敷地内は、真っ黒だった。黒い服を着たひとたちが沢山いた。そしてみんなが泣いていた。黒い服のひとしか入ってはいけないのかと思って、僕は自分の服を見た。僕はゆっくりとその集団に混ざった。

僕はその泣いている人たちの中におばちゃんを探した。けれど見つけることができなかった。そのかわりに僕はおばちゃんの娘を見つけた。

おばちゃんは、どこにいるの、僕は尋ねた。

来てくれたの、ありがとう、おかあさんならそこにいるわ、何か言ってあげて、おばちゃんの娘はひとつの方向を指差した。

そこで僕はさっきおばちゃんを見つけられなかった理由が分かった。おばちゃんだけは黒ではなくて、全身白だったのだ。おばちゃんは目を閉じていて、眠っているのだと思った。何か言ってあげてといわれても、僕はなにを言えばいいのか分からなかった。少しの間迷った末に、僕はおばちゃんに向かって言った。また、本を読みに来てね。

僕の後ろの啜るような鳴き声が、大きくなったのを感じた。

僕はなんだか怖くなって、おばちゃんから離れて、家に帰ろうと歩き出した。そのとき、誰かに腕をつかまれた。振り返ると、おばちゃんの二人目の娘だった。そのひとは僕が止まっても僕の腕を放そうとしなかった。それどころかギリギリと締め付けるかのように僕の腕を握り締めた。痛いよ、そういおうとしたけれど凍てつくようなそのひとの視線に喉がかすれて、うまく声が出なかった。

あんたがいなければ、そのひとはそういった。いなければ、もう一度言った。

そこに、僕におばちゃんの居場所を教えてくれたお姉さんがやってきてなにやっているの、やめなさいと慌ててそのひとに言って、僕の腕から手を離させた。つかまれたところが青くなっていた。

ごめんね、痛かったでしょう、お姉さんは僕に謝った。大丈夫だよ、僕はなんとか擦れた声をだして、そう言った。もっときちんと声をだしたかったのだけれど、お姉さんのうしろから僕を睨み続けるそのひとの視線が怖くて、出せなかった。

帰ります、そういって僕はお姉さんたちに背中を向けて走り出した。背中を向けているのに、そのひとがまだこちらを見ているのが分かって、僕は怖かった。

あとで聞いた話なのだけれど、おばちゃんは車にはねられて死んだということだった。近所のスーパーに、飴玉を買いに行った帰りのことだった。おばちゃん以外の家族は、そのころみんなで旅行に行っていて、帰ってきたときにはもう息を引き取っていたらしい。

なんとなく気づいていた。おばちゃんが僕のために旅行にいかず家に残ったのだということを。僕に怒るために、という言い方はな

んだかおかしいけれど、とにかく僕のために家に残って、そして飲酒運転をした車にはねられて死んだ。だからおばちゃんの二番目の娘は怒り狂った顔で僕を見たのだ。

その次の日から、おばちゃんがくることはなかった。僕も叫ぶことをやめた。僕が叫ぶことをやめて三日後、隣に住むおじちゃんがぼくのうちに尋ねてきた。

どうしたの、僕はおじちゃんに聞いた。頭を殴られたときのジンジンとした痛みが僕のなかによみがえってきて、うるさくしてないよ、と僕は言った。

するとおじちゃんは照れたように笑って頭を掻いた。いや、お前が騒がねえから、見に来たんだ、おじちゃんは言った。僕はおじちゃんの言いたいことがよく分からなかった。だから、そのまま黙っていた。

しばらくの沈黙のあと、おじちゃんは僕の頭に手を置いた。殴られたときのたんこぶに手が当たって、少し痛かった。そしておじちゃんは言った。殴って悪かったな、おじちゃんも悲しかったんだ、痛かったよな。

あんまりにも沈んだ目でおじちゃんが僕を見るものだから、僕はおじちゃんに殴られた痛みはどうでも良くなってしまった。大丈夫だよ、僕は答えた。おじちゃんは小さくそうか、とつぶやいた。またしばらくの間、二人とも何も喋らなかった。

おじちゃんは相変わらず僕の頭に手を置いたままで、僕の頭も相変わらずズキズキとした。なあ、坊主、元気か？唐突におじちゃんは聞いた。僕は足に擦り傷とあたまにたんこぶがあるくらいで、病気もなにもしていなかった。だから、元気です、と答えた。そうか、それはよかったとおじちゃんはいった。

三回目の沈黙が僕らを襲った。おじちゃんは無言の時間をしばら

く過ごした後、僕の頭をぽんぽんと二回軽く叩いてから、自分の家に帰って行った。

そのまた三日後に、僕におばちゃんの居場所を教えてくれた一番目のお姉さんが、僕の家に訪ねてきた。お姉さんは、僕に飴玉の入った新品の袋を手渡した。お母さんが最後に買ったものだよ、君のためのものだから、君にあげるよ、お姉さんはそういって僕に手渡すと、最後にそれじゃあね、と小さく笑ってそそくさと帰っていった。

僕がお礼を言う暇もないほど早く帰って行ったけれど、僕にはお姉ちゃんの笑った顔がしっかりと見えた。僕の腕をキリキリと締め付けたひとと、似ている目をしていた。

その日の夜僕のお母さんは僕の手にもっている飴玉を見てそれどうしたのと聞いた。僕が斜め向かいの家のお姉さんにもらったと答えると、お母さんはふうんといってパソコンの前に座った。僕の答えをきちんと聞いていなかったような気がした。悪いんだけど今から仕事をするから話しかけないでね、お母さんがそういったのを聞いて僕はわかった、もう寝るね、おやすみなさい、と言った。お母さんからの返事はなかった。

僕はまた一人になった。僕は寂しい。

2　馬鹿なひと

大きな桃色の飴玉を口の中で転がしながら、僕は真っ暗な道を歩いていた。
モモの味が口の中で動き回って、くすぐったい気分になる。道端でこけた少年を助けたらくれた飴玉だった。
あの男の子がはじめに差し出してきた赤色の飴玉を、僕は受け取ることができなかった。毒々しいまでの赤、きっとイチゴ味のそれが、母親の唇の色と酷似していたからだ。そして次に差し出してきた桃色の飴玉を、僕は精一杯のお礼の言葉とともに受け取った。
ミカさんの家にいこう。僕は方向をかえて歩き出した。

僕がミカさんに出会ったのはある日の偶然だった。
その日も、僕は行くあてがなかった。
その日、ミカさんは愛している人に裏切られた気持ちでぐちゃぐちゃだった。
僕らはお互いの心をうめるために、手を取り合った。いや、この言い方だと聞くひとに弊害があるかもしれない。僕は、心というより、ただ、気持ちよく眠れる場所を求めていただけだった。父親が死んでから、母親が時々家に男を連れ込むようになったせいで、家に帰れない日々が続くことが多かったのだ。

転がり込んだ莫大な財産と、まだ若々しく、美しさを兼ね備えた母親は、男には僕はいないものとみなして接しているようだったから。

それから僕は、家に帰れない時間をミカさんの家で過ごすようになった。僕とミカさんは、同じ家に二人きりでいるときもあまり喋らなかった。それでも、ミカさんは恋をしている相手の話題になったときだけは、お酒を飲んだ時よりも饒舌になった。

相手は十歳年上の、会社の上司だといった。

妻子持ちのひとで、不倫愛なの。ミカさんは何度もそう語った。

ミカさんは不倫という言葉を口にするとき、まるでこの世の終わりのような顔をした。

いつか別れてくれると思ってた、彼も別れると言ってくれたもの。でもね、心のどこかではそれが嘘だろうってこと知ってた。知ってたけど、それを口にしたら私は捨てられてしまうかもしれないと思ったら、どうしても言えなかった。けれどこの前彼が、私に、妻と別れる気はないって、はっきりそういったの。私、ずっと我慢してたのに、あっさりそういわれちゃって、自分が、馬鹿みたいで。

一息でそういったミカさんは目を伏せた。それで僕を誘ったの、僕は聞いた。聞いたというより断定に近かったけれど。ごめんね、こんな理由で、ミカさんは謝った。全く悪いとは思っていない声だった。

馬鹿なひと、僕は心の中でつぶやいた。ミカさんに、不倫という言葉は無縁のように見えた。僕とひとまわりほど違うのに、僕よりもずっとこどもだった。不倫という言葉をつむぐピンク色の唇は、

言葉にひどく不釣合いだった。けれど彼女の、彼を思うときの熱を帯びた目だけは、おとなを感じさせた。

そうして、この不思議な関係は一年ほど続いていた。

二人の夜ご飯は外食が主で、ときどき家で食べた。ミカさんは壊滅的に料理が下手で、作るとしたら僕が作っていたのだけれど、ミカさんはそれが嫌なようで手伝おうと何度も台所に来て、失敗をしては僕に笑われながら叱られていた。

僕はミカさんに聞いた、どうしてそんなにも手伝おうとするの、適材適所って知ってるの、半分冗談だった。

ミカさんは答えた、女と大人のプライドがあるの。

フライパンの中身をぶちまけて片付けるためにしゃがんでいたミカさんは、潤んだ目で僕をみた。悔しさの沢山詰まった涙が、大きな瞳から今にも零れ落ちそうだった。

やっぱり、馬鹿なひと。僕はまた思った。

あるときミカさんは、また失敗をした。包丁で、自分の指を切ってしまったのだ。あ、とミカさんは小さく声を上げた。

僕の嫌いな色に限りなく近い赤の鮮血が、彼女の指先をつたって、床に数滴落ちる。

大丈夫。ミカさんは僕が何か聞く前にそういった。大丈夫、料理を作っていて、自分で手当てできるから、早口にそうまくしたてる

と、足早にキッチンから出て行こうとした。

なんて馬鹿なひとなの。僕は思わず声に出した。

ミカさんは不思議そうに、不安そうに、振り返って立ち止まった。それも女と大人のプライドなの、僕は尋ねた。ミカさんは驚いたように僕を見ていた。

そういえば僕がミカさんを非難するようなことを言ったのは初めてだった。そうだよ、プライド、なにが悪いの。ミカさんは僕の物言いに少し怒ったようだった。別に悪いとは言っていないでしょう、僕は呆れたように言い返した。

ミカさんは一瞬言葉に詰まった。じゃあ、なんでそんなこと聞くの、なんで馬鹿なんていうの、ミカさんの瞳に少しずつ涙が浮かんできていた。

ごめん、もういいよ、気にしないで、僕はそう言って話を無理やり打ち切ろうとした。

これ以上話してはいけないと思った。都合が悪くなったら打ち切るの、ねえ、最後まで言ってよ。ミカさんの目からは涙が溢れ出してきた。

それが頬を伝い、床に落ちる。透明のそれが、先ほどの赤に混じって不思議なコントラストを作り出すのが目の端に映った。

泣くの止めてよ、僕は少しきつい言い方をした。女のひとの涙は嫌いだった、自分を守るため、飾るためのものとして使われることに不快感をもった。仕方ないでしょ、止まんないの、あのひとと、おんなじこと、いわないで、よ、ミカさんはしゃくりあげながら、服の袖で必死に顔を拭って涙を止めようとした。

ほら、それが馬鹿なんだよ、僕は言った。

どうしてそんなにも意固地なの、意地をはるの、まだ僕に恋人を重ねてしまうくらいそのひとが好きなんでしょ、ミカさんのそのちっぽけなプライドはいったいなにを守っているの、どれだけ馬鹿なの、一度で言い切った。

ミカさんはしばらくの間俯いたまま、顔を上げなかった。小さなしゃくり声だけが、部屋のなかに響く。

意味、わかんないよ、ミカさんはやっと言葉を発した。

ミカさんは馬鹿だから、わかんなくてもしょうがないよ、僕は笑いながらそう言って、そっとミカさんの手をひいて、まだ血の止まらない指の血を水で流させた。それからリビングに移動して、救急箱から絆創膏をだす。指、出して、僕はミカさんに言った。ミカさんは素直に従った。指を器用に動かして、綺麗に絆創膏を巻く。その間僕達は無言だった。

例えばね、僕はそっと話し始めた。例えば、ミカさんが、一番こうして絆創膏をまいてもらいたいひとは誰。一緒に料理をしたいのは誰。へただねって笑われても、そのプライドがでてこないで、素直に痛いっていえるのは誰。ミカさんは、黙ったまま、窓の外を見つめて聞いていた。

僕じゃないでしょ、あの大好きな彼なんでしょ、どうしてそんな簡単なことを、仕舞いこんでしまうの、どうして彼を好きになったの、セックスのためじゃないでしょ、お金のためじゃないでしょ、彼のこと、愛しているんでしょう。

こどもを叱りつけるように、僕はミカさんに話し続けた。

そうだけど、でも彼には、奥さんと、こどもが。

僕がこれだけ話し続けても、ミカさんはまだプライドに邪魔されていた。こういうのも、恋は盲目というのだろうかと、ふと思った。

不倫っていうただの言葉に負けるくらい、ミカさんの思いは小さくないでしょ、どうして、そんなにも大きな思いを小さなプライドに邪魔させるの、その彼が、奥さんと別れたくなるくらい、ミカさんに夢中にさせればいいでしょう、ひとのことなんてどうでもいいでしょう、自分の幸せのために、もっと頑張ろうと思えないの、ねえ、馬鹿じゃないの。

そこまで言って、僕も黙った。ミカさんの目からはとまったばかりの涙がまた、溢れ始めていた。泣きたいのはこっちなのにと、僕はその気持ちを心の中に留めた。

ごめんなさい、ミカさんは一言そう言った。

それから僕等は料理を再開して、ご飯を食べて、お風呂に入って、一言も話さずに眠りについた。

次の日、目をさますと家の中には誰もいなくなっていた。机の上に、小さな書置きがあった。

“いってきます”

ああ、僕の目から涙が出てきた。昨日あれだけ泣くことに嫌悪を示したというのに。どうして、自分の幸せよりも、ミカさんの幸せを願ってしまったというのだろう、馬鹿なのはミカさんではない、僕なのだ、ひとの気持ちをあれだけ理解しても、自分のことは、知るのさえ怖かった。

僕はもう一度、ミカさんの残した書置きを見た。
いってきます。帰ってきたときのおかえりなさいを期待しての言葉。最後まで綺麗なひとだった、優しいピンクの色をまとって、笑顔と同じくらいに、涙もが似合うひとだった。

最後くらい、僕のためにその綺麗な涙を流してもらってもいいだろうか。

その日、僕はいつのまにか増えていた僕の私物を全てまとめて、ミカさんに別れを言わずに、小さな書置きをそっと残して、部屋をでた。

“さよなら”（僕の初恋のひと）

3　縋るひと

気付いたのは、あのひとの子どもを授かって、幸せ絶頂のあのころ。仕事で遅いとか、飲み会が長引くとか、やっと出世コースが近づいてきたかもなんて、のんきに構えていたのは浅はかなわたし。

あのひとがそんな風に忙しくなってから半年たったころ、昔からの友人に、実はね、あなたの旦那が知らない女と腕をくんで歩いていたのを見たかもしれないの、なんて私の顔色を窺うように言われたら、気にしないほうが無理だった。

自分が顔に出やすいのは幼い頃から重々承知している、だからそっと、彼に気づかれないように部屋を探したりとか、携帯電話の履歴、メールを調べたりとかして、それで、認めなくてはならないような証拠を見つけた。

一番最初に襲ってきたのは、眩暈。貧血や熱があるとき以外にも、眩暈が起こることを初めて実感した。

冷静に物事が考えられるようになってから、わたしはどうしたらいいのか考えた。けれど、なにも考え付かなくて、彼にそれとなく尋ねることさえもせずに、また一年が過ぎた。

私は臆病者だ、だから結婚も三十路過ぎ、それでも何とか三十代前半に新しい命に恵まれて、恵まれて、恵まれて、恵まれたのに。

私は臆病者だ、取立て容姿に恵まれたわけでも、秀でた才能を持ったわけでもなく、結婚をした相手だってそんなもの。それでも私はあのひとの優しさに惹かれたし、彼も私に惹かれたから、こうして一緒に暮らしているのだ、そう思っていた。

けれど彼はもう私から離れていこうとしている、一体どうして、足りないのはなに？私だって女なのだから、こういうときに考えてしまうのは容姿のこと。ひとに不細工だとはいわれたことはないけれど、あなた可愛いね、の一言から関係が始まった友人が居るわけでもない。そんな私。普通の私。それで満足していたのに。

私はあのひとの浮気を知ってから三ヶ月ほど後に、探偵にあのひとの調査を頼みに行った。

このとき私は別れようと、今思えばできるはずのない決意をして、その決定的な証拠を掴みに言ったのだ。調査はたったの三日間で終わった。あのひとと相手の女はそれほどにまで悠々と、二人で仲良く道を歩いていたのだ。

はっきり言えば、負けたと思った。相手の女は綺麗だった、浮気、とか、不倫、とか、そんな言葉を知らないのではないのかと思ってしまうような、綺麗なひと。

あのひとにはまったくつりあわなかった。なのに、あのひとの隣で凄く幸せそうに微笑んでいる。

私には叶わないと、私は家で一人嘆いた。けれども日常は日常として過ぎて行ってしまう。私はあのひとのためにご飯を作り、子どもの面倒を見て、洗濯をして、アイロンをかけて、掃除をして、毎日を暮らす以外に自分がすることを思い浮かべられなかった。

それから少したった暑い日、私は思わずぽろりとあのひとに浮気のことを言ってしまった。

まったく言うつもりもなくて、冗談でも言おうとしたときに出てきてしまった言葉。あのひとは驚いて固まった。私はもっと驚いて持っていた皿を床に落としてしまった。

ガラスの割れる独特の音とともに、寝室で寝ていた娘の泣き声が響きだす。私は訳が分からなくなってしまって、割れた皿を先に片付けるべきなのか泣き出した娘を先にあやすべきなのかも分からなくなって、足が地面にくっついてしまったかのようにその場から動けなかった。

僕が皿を片付けておくから君はいったんあの子をあやしてきて、彼のその言葉で何とか我に帰りふらつく足でベビーベッドへいってそこから娘を抱き上げて、恐る恐る揺らす。もう慣れたものだったはずのその行為さえもなぜだか上手くできなくて手が震えた。

そして娘はその動揺を読み取ったかのように一向に泣き止んでくれなかった。それでもなんとか眠りにつかせてゆっくりとベビーベットに置きなおす。そして薄いタオルを娘のおなかの周りにかけた。

リビングに戻ろうと一度回れ右をした体は、もう一度回れ右をしてもとの位置に戻る。あのひとと顔を合わせたくなかった。けれど皿を片付け終わったらしいあのひとがゆっくり歩いてくる音がして、私はなすすべもなくその場に立ち竦んだ。

リビングで話そう、彼の言葉に私は頷くしかなくて私は彼の後に続いてリビングに戻った。

それからどのくらい彼と話をしていたのか、私にはまったく分からなかった。

彼にいつから気づいていたのかとか、何故気づいたときに言わなかったのかとか、たくさんされる質問に馬鹿正直に答えていた。浮気されたのは私なのにまるで逆のような雰囲気。

時計を見て一時間以上は優に立っているのだということに気づいた。

だったらもうそろそろあの子が泣き出す時間だな、そんなことまで頭の片隅で考えてしまえるほどに私の感覚が狂ってしまっていた。けれどその狂っていた感覚はあのひとの次の言葉ですぐに現実に引き戻された。

別れないか、彼は確かにそう言った。

そんなの嫌だと今すぐにも否定してしまいたいのをわたしのちっぽけな自尊心がはちきれそうになりながら反対をしていた。どうしたらいいのかまったく分からなくてなにも声を発することができない。そんなとき娘の泣き声が二人の耳に入る。

私は立ち上がってまた娘のところに言ってベビーベッドから抱き上げた。そして今度もさっきと同じくらいに弱弱しくあやす。今回は娘は早々に寝付いて、私はまたベビーベッドに娘を下ろそうとしてそれをやめた。そして娘を抱えたまま今度はしっかりと回れ右をしてリビングに戻る。そしてあの人の前に座って、小さな娘を抱きしめて言った。

この子が大きくなるまでは、私はあなたが浮気をしようが何をしようが別れる気はありません、この子に寂しい思いなどさせてたまるものですか。あなただって、私に愛が無くたってこの子に対してはあるでしょう。

こんなにもまっすぐにあのひとと話をしたのは初めてかもしれなかった。あのひともそんな私に少し驚いているようだった。
そうだな、別れるなんて言い出して悪かったよ、あのひとはすぐに謝って別れるという選択を取りやめた。私の心は一気に安堵に包まれて、今日はもう寝るわと言って娘を抱いたまま寝室に引き上げた。
そして娘をベビーベッドにおくと倒れるようにダブルベッドに寝転ぶ。

この子のためにも別れたくないなんて建前で、私が別れないために、この子を使っただけ。そんな自分に嫌気が差して私は早く寝てしまおうと目を閉じた。
きっとまた明日からは今までどおりの生活に戻るのだ、何も変化がなく。私とあのひとはもうそういう関係だった。

そして私が、あのひとがこのとき浮気について一度も謝らなかったことに気がついたのは、あのひとが私の元から去っていってしまった後のことだった。

4　狂うひと

友人が浮気をされたらしい。そんな噂がどこからか自分の耳に入ってきた。ひとの口に戸は建てられないものである。あの子も可哀想な子、これから浮気をされた女としてずっと惨めな思いに駆られるに違いない。

そう思いながらも私はその彼女に同情しようとなどこれっぽっちも思わなかった。

浮気くらい、何だというのだろう。

私は病院のドアを開けて、ベッドに眠る愛しい人間の顔を見た。目覚めない彼は私が今ここにいることも、私が彼を愛していると言うことだって、わかっちゃくれない。どうして私が浮気された女に同情してやらなきゃいけないのだ。だって浮気されたって、相手は口が聞けるじゃないか。自分が愛しているのだと言うことを、感じ取っては貰えるじゃあないか。

一時間ほど彼の顔を眺めて、彼に語りかけた後に私はその部屋をでた。途中で彼の母親とすれ違って、どうでもいい世間話を二言三言話した。温かかくなりましたね。仕事はどうですか。私は彼の母とこうしてよく廊下で出会い、廊下で話す。彼の話はしない。まだ

かろうじて生きているひとに対して、まるでそれがタブーであるように、触れてはいけないものであるかのように、振舞わなくてはやっていられなかった。

病院にはいろいろな人間がいるものだ。私はすれ違う人間すべてに憎悪の感情を抱く。

まだ年若いカップルを嫌悪する。パジャマを着て点滴をしながら椅子に座っている少女に何事かを話しかける青年。その顔の明るさが嫌になる。

老いた老夫婦に悪意を抱く。車いすに座っている老人に穏やかに何事か話しかけるその妻。その表情の柔らかさが気に入らない。

あの人と私は、もうそんな風にはなれない。彼が植物状態になってからかなりの年月がたっていた。私の愛しい彼があの状態であんなにも長く生きて居られるのは、一重に彼の両親の財力のおかげだ。彼の両親がもしも普通の人だったら。彼はとっくに灰になって私の手の届かないところに行ってしまっていたのだろう。けれど幸か不幸か彼の両親は金持ちであった。一代で大儲けした所詮成金と言われる奴であったが、それでも金は金。

だからこうして諦めもつかないまま宙ぶらりんのところに、彼も私も放り投げられてぶらぶらと揺れているのかもしれない。

病院の外はそろそろ、半袖の似合う季節が近づいてきていた。

私の服装も一年を通して変わる。長袖。半袖。

タンクトップ。カーディガン。セーター。

どれも持っているけれど、オシャレとはほど遠い。彼が生きてい

たころは、私は目いっぱいおしゃれをしていた。彼の好みの服はどれだろうかとか、このスカートは年齢に合わないだろうかとか。家の全身鏡の前で、店のショーウィンドウで、試着室で、私はそんなことを何度も繰り返した。あのころは楽しかった。彼と会っている時、彼を見つめているだけでずっと。

彼が事故にあってから、私は忙しい仕事の合間を縫って週に二回は彼の元へ通うようにしていた。彼の入院は多くの人が知っているわけではないし、彼の両親も忙しい人だから、病室ではいつも二人きりだ。

私はその時間を何よりも大切にしていた。私たちはお互いに忙しく、彼と二人きりになれた時なんて数えるほどしかなかった。だからその部分だけは良かったのかもしれないと言ったら不謹慎だろうか。もちろん本当は彼が動いているのが見たい。喋っているのが見たい。

いつ行っても同じだった。いつも通りの顔で、いつも通りの格好で、いつも通りに私を見ない彼。そんな彼を見ながら部屋の中を見回して、花瓶の中は造花がもう何週間も同じままで味気なかったので、次は新しい造花を買ってこようと思った。大体生花が駄目なんて、安全面の考慮なんて言われたってやっぱり味気ないものだ。

そんなことを考えて、彼の顔を見て、私はまた病室を去る。帰り際に彼の母親にまた会って、部屋の造花を変えることを告げて見た。すると母親はいいわね、私もやろうかしらと返してきた。

私がやると言っているのに、彼女は時々こうして噛み合わない返

事を返す。彼が入院してから、彼の母親は少しずつおかしくなってきているように見えた。気疲れか、苦労か、不幸か、そう言ったものが集合して母親は会話の中でときどき話をおかしくしたりした。
彼の世話はすべて私がやるから休んでくださいと言いたかったが、母親のプライドや息子への愛情のことを考えるとそんなことは言えないな、なんて思った。

そんなある日のことだった。
私は彼に会いに行く時間が遅れてしまって、いつもより一時間ほど遅く彼の部屋に入った。
それでもこの前言っていた造花は綺麗にラッピングして持ってきていた。ガラリとドアを開けて彼の顔を確認して、花を変えようとして気がついた。前見た花ではなく、新しいものになっている。
私がやると言ったのに、どうやらあの母親は自分で済ませてしまったらしい。仕方がないので花瓶には差さず、花束を窓の傍に横たえた。

そのときガラリとドアが開いて、知らない女が入ってきた。私は初めて見るその顔に疑問を抱いた。女もそう思ったのか、首を傾げて不思議そうな顔をしながら口を開いた。

彼の親戚の方ですか？

そう問われて私はカチンときて、ぶっきらぼうに違います、と返した。すると女は言った。

私は彼の婚約者だったんです。

は？　私は思わず大声でそう言った。何をいっているのかまったく理解できなかったのである。婚約者。何言ってるのと私は返した。この女は嘘をついているのかそれとも彼の母のように頭が触れてしまっているのか。

婚約者は私です。貴方一体何なの？

私は睨みつけてそう言った。すると相手はまるでびっくり仰天というようにぽかんと間抜けな顔をして、そして怯えたように私を見た。そのときに彼女の後ろから、見知った彼の母親の顔がひょいと出てきて、私は安堵した。母親が来ればこの狂った女を追い出すことができるだろうと思ったのだ。私は母親に助けを求めようとした。けれどもその前に、女が口を開いた。

おかあさん、この人どなたですか？彼の婚約者だなんて言うんです。

彼の母を慣れ慣れしくもお母さんなどと呼んだその女は心底不思議そうな顔でそう問うた。なんてしらじらしい演技をする女だろう。気がおかしい女の演技など誰も信用するはずないのに。

いつも病院でよく会う方よ。あなた、息子の病室で何やってるの？

母親はなんとそんな風に私のことを紹介した。ずっと彼を寄り添い、そして彼の母である台詞の主を支えてきた私に対して一体どうしてそんなひどいことを言うのだ。

なんとも不審げに、しらじらしく言われて私の中で怒りがどんどん溢れ出てきていた。いったいぜんたいどうして私がこんな風に訳

の分からない茶番に巻き込まれなくてはならないのだ。

私は彼の婚約者じゃないか。時間があれば病室に通っては彼の世話をしたり、母親と話したり、甲斐甲斐しくやってきたというのにいきなりどうして私を赤の他人のように扱うと言うのだ。怒りにまかせてそう捲し立てると、二人の女は私を見て青ざめていた。

お母さんこのひとおかしいわ、警察。

いやだ、もしかして、ずっと前に息子が言っていた……。

女たちがぺちゃくちゃとなんとも身勝手な台詞を吐く。

出て行って、この病室に二度と入らないで頂戴。若い女にそう言われて、私の中の何かが切れた。

何よ、何よ何よ！

意味が分からないと言う人々に向かって私は叫んだ。意味が分からないのはこっちよ。私から彼を奪うなんて許されない。許されることじゃない。

私は怒りにまかせて彼の体中に纏わりついているチューブを引っぺがした。ぶちぶちと嫌な音がする。耳障りな音だ。

ひい、と彼の母親が悲鳴を上げた。横にいる汚い女は驚きで口もきけないようだった。なんてこと、貴方一体何なの、彼の母の声がする。病院で毎週のように話していたくせに、そんなことを言うなんて。彼の恋人である私に、そんなことしようとするなんて。あり得ない。あり得ない。

私は彼を抱えて引きずるように窓の外に身を乗り出した。五階。

彼の名を女が呼ぶ。誰か来て、と叫ぶ声。
なんてことを、やめなさい。母親がそう言っているのが後ろの方で聞こえた。

私から彼を奪わせるものか。彼と私は一緒なのだ。ずっと。生まれた時から。死ぬまで。それをどうしてこいつらに妨げられなくてはならないの。
私は身体を大きく突き出して、地面を蹴った。身体に浮遊感が訪れる。最後に目に入ったのは私が買ってきた造花と、チューブから解放された彼の顔。

私は微笑んだ。これでやっと、一緒だ。

「ニュースをお伝えします。今日午後二時四十五分ごろ、○×病院で女性が植物状態の男性を抱えて飛び降り自殺をしました。女性は男性に数年前からストーカー行為をしていたと見られ――――」

5　愛すひと

「私、自分の気持ちを推測されたりするの、大嫌いなの」

だからあんた嫌い、話しかけないで、近寄らないで、どっかいって、消えうせて。

曲がり角の向こう側から、そんな声が聞こえてきて、しかもその声が聞き知ったものであった僕は軽く駆けて、急いで角を曲がった。そこには案の定、彼女がいた。道路に蹲って、持っていたのであろうスーパーの袋は、力なく道に横たわっている。

そして隣には、心配して彼女に声を掛けてくれたのであろう、立ち尽くす一人のおばさん。推定年齢四十代後半。右手で子どもと手をつないでいた。顔は驚きで固まっている。当たり前だろう、蹲っている女に親切で声を掛けたのに、あんな返事が返ってきたのだから。

僕はかるく息を吐き出して、三人に駆け寄った。

「ほら、何やってるの、もう」

横たわるスーパーの袋を持ち上げて、力いっぱい彼女を引き上げて、僕の肩に手をまわして彼女をどうにか立たせた。

「迷惑かけてすみません。もう大丈夫ですので」

未だに動かないおばさんに適当に挨拶をして、僕は彼女を支えながら歩き出した。後ろでおばさんがどもるように返事をしたのが分かった。少しとげとげしい返事だ。あぁ、やっぱり怒っていた。

「駄目でしょ。心配してくれてる人にああいうこと言ったら」

ゆっくりと歩を進めながら、僕は幼い子をあやすように彼女に語りかけた。彼女は返事をしない。怒られたときなにも言わなくなるのは、いつものことだ。

左手に彼女、右手に重たいスーパーの袋を持って、僕は彼女のペースに合わせるように歩いた。一歩一歩ゆっくりと歩くたびに、右手に袋が食い込んで痛い。ちらりと横を向くと、彼女の辛そうな顔が見えた。このまま歩いて行くのは難しいだろうか。今日はすでにずいぶんと疲労しているようだった。

「ちょっと休んでいこう」

僕は近くにあった公園のベンチに彼女を座らせた。その横に袋を置いて、そのまた横に僕も座る。袋を椅子に置いたときの、ドサッという豪快な音が耳についた。彼女は僕と会話をする気がないようだった。　決してぼくと目を合わせようとせず、公園の時計、ブランコ、滑り台、シーソーと視線を投げかけていく。僕も特にすることもなく、彼女が持っていた袋に目を向ける。描いてあるロゴの、大きく笑った顔は、袋が伸びたせいで苦笑いをしているように見えた。中身は、色とりどりの飲料物。黄色に紫、赤、青色までである。

共通しているのは、全部野菜ジュースだということ。

「こんな重いもの、よく持てたね」

返事が返ってくるか分からないから、かろうじて彼女に聞こえるくらいの声で口を開いた。やはり彼女は言葉を返さない。僕が返事に期待をしなくなったとき、彼女はぽそりと小さな声で言った。

「別に、そんなに重くなかった」

こちらを見ないでそう告げる。強がりなのもいつも通りだ。

今彼女の興味を引いているのは、ブランコに揺れている二人の少女のようだった。笑い声が響いている。彼女は細い腕を持ち上げ、光を遮ろうと手を目の上にかざして、ずっと少女たちの揺れ合いを眺めている。

「なんでこんなに野菜ジュースばかり買ったのさ？」

今度のその質問は、返事に先ほどよりも長く時間がかかった。赤と青のペンキで塗られたばかりのブランコはまだ止まることを知らない。少女たちは高さ比べをしているようだった。二十回ちかくブランコが上下したあと、彼女はぽつりと言った。

「栄養とろうと思ったの」

薬、嫌いだし、ご飯、食べたくないし、これが一番いいと思ったの。僕は少しだけ驚いた。そして嬉しくなり軽く微笑む。彼女は生きたいと思っているのか。

「言ってくれれば、僕が買ってきたのに」

「それじゃ意味ないでしょ」

僕の彼女を想った提案は、今までにないすばやい返答で却下をさ

れた。
ごめん、僕は声だけで謝って、彼女の髪の毛に指をすべらせた。彼女は何も言わずに、袋にはいったジュースの上に器用にベタッと上半身をのせていた。
そのとき突然、静寂を壊す大きな声が耳に聞こえた。

――ママ、おかえりなさあい！

ブランコに乗っていた少女たちが、母親の姿を見つけ、ブランコから飛び降りて走っていく。公園のエントランスに、綺麗な女のひとが立っていた。二人の少女は勢いをつけて母親にしがみつき、ひとりはおんぶで、一人は手をつないで、そのまま三人で公園から出て行く。それをうつろな目で眺めていた彼女は、いきなり立ち上がった。

「あれ、乗る」
「ブランコ？」

彼女は僕に返事をせずにブランコに向かって歩いていった。待ってよ、僕は歪んだ笑顔の袋を一度ちらりと見てから、それをそこにおいたまま彼女の後を追った。
彼女は先に赤いブランコに座って、小さく漕いでいた。僕も横の青いベンチに座って、漕ぎ始める。大きく足を伸ばして、曲げて、空気をゆっくりと身体に受け始める。ブランコはペンキこそ新しいが、骨組みは僕が小さい頃遊んだままで、揺れるたびにジーコジーコと音がした。
高く、低く、身体が浮くような感覚にとらわれながら僕は少しの

間目を瞑って、それに身を任せた。ふと目を開けると、隣のブランコがさほど揺れていないことに気づく。僕は足を大きく地面につけて、砂埃とともに靴をずってブランコを止めた。

「大丈夫？足、動かすのつらい？」

「別に、大丈夫だから」

――なんでそういうこと聞くの。

小さく揺れたまま彼女は答えた。まっすぐ前を向いて、やっぱり僕の方を見ようとしなかった。ああもう、僕は小さく微笑みのようなため息をついた。鎖を掴んで、彼女のブランコの揺れを止める。

ちょっと、止めないでよ、そう口を開く彼女を無視して、彼女の座っているブランコの両端に足を乗せて、勢いをつけて立った。

「しっかりつかまってね」

僕は足を曲げて思いっきり漕ぎ始めた。高く上がっていくにつれて、彼女が鎖を必死に握り閉めているのが分かった。十回ほど漕いで、あとはゆっくりと止まるのを待った。揺れは少しずつ小さくなり、止まった。

「楽しかった？」

「怖かった」

ブランコを折りながら聞いた僕に、彼女はポツリと答えた。公園のエントランスを見て、それから僕に目を向ける。

「そろそろ、うちに帰ろっか」

僕は彼女にいった。こくり、彼女は縦にクビを動かす。けれどその場から動こうとしなかった。僕は言葉を飲み込んで、彼女の前に背中を向けてしゃがみこんだ。

「おぶってあげる」

ほら、乗って、僕が強引にそういうと、彼女は倒れこむように僕の背中にもたれかかった。僕は足に軽く力を入れて立ち上がった。そのままゆっくりとベンチまで歩き、内側が水滴でベタベタとした袋を手首にかけた。

「今日だけ特別に、僕のことママって呼んでもいいけど」

エントランスまで来たとき、僕は小さく微笑んで言った。彼女は無言だった。僕のいった言葉の意味を、本気と冗談と、どちらにとったのだろうか。それから五分、僕は家までの道をゆっくりと歩いた。閑静な住宅街ですれ違う数人は、いつも僕らのことを奇異の目で見る。けれど僕らはそんなことはもう慣れっこで、気にせずにゆっくりと歩き続けた。

「ねえ、ママ」

彼女が声をあげた。僕の言葉を本気にとったようだった。

「わたしが死んだら、どうする？」

彼女がよくするいつもと変わらない質問だった。いつもは僕も変わらず、どうすればいいかわからなくなるよ、と答えていた。けれ

ど、今日は違った。その返事はやめた。

「どうすることもしないよ」

僕は答えた。彼女が背中で小さく動くのが分かった。きっと僕の言葉に絶望を感じ取ったのだ。すぐに意味を取り違えるのが、彼女の悪い癖。

「そっか」

彼女は僕の背中で縮こまった。それきり、口を開こうとしない。彼女が話を続けないのを確かめて、僕は口を開いた。

「きっと僕は、どうすることも、できなくなってしまうと思うんだ。話すことも聞くことも見ることも全部やめて、食べることもしなくなる。それで、僕の人間としての機能をすべて止めてしまうんだ」

後追い自殺ではない。別に死にたいと思うわけではない。けれど、生きるために必要な行為をする気などおきなくなる。そして、後を追うかのように、君の元へ行くよ。

背中で小さくなっていた彼女が、僕に強くしがみついた。

「野菜ジュース買ってきてよかった」

彼女は呟く。見えなくても、微笑んでいるのが分かった。

「ママは私がいなくちゃ寂しいよね、つまらないもんね」

ふふふ、よほど嬉しいのか、笑い声まであげる。

「わたしもママがいてよかった」

笑い声とともに、そうもいった。僕も嬉しくなる。

「じゃあ今日は、サービスでこのまま走ってあげるよ」

その言葉を言い終わらないうちに、僕は足に力をこめて走り出した。背中にいる彼女の笑い声が聞こえる。

「走るのは、パパの仕事」

家の前について僕が彼女を降ろしたとき、僕の耳に、そんな言葉が届いた。ぼくはそうだねという意思をこめて、頷く。そして門を開けて入ろうとしている彼女に向かって言葉を発する。

「僕は君のパパだよ」

彼女はその動作をピタリととめた。

「それに、おじいちゃんでもあるしおばあちゃんでもあるし、兄弟でもあって、もっと言えば友人、恋人、もしかしたらペットかもね」

君にとっての僕は、そういうものでしょ、僕が小さく呟いた最後の言葉まで彼女にはしっかりと聞こえたようだった。

「私の気持ちを、勝手に推測しないで」

彼女は僕に背を向けたままそういった。けれど今はあまり怒っていないようにも見えた。
僕は彼女に気づかれないように小さく微笑む。違うよ、推測なんかしなくたって、分かってしまうんだからしょうがないんだ、僕はそう言おうとしたのを止めて、彼女の背中を押して家に入るように促しながらわざとらしくため息をついた。

「だったら、言ってくれなきゃ、わかんないよ。生きていくんなら、もっとコミュニケーション能力は必要」

なにも言い返さない彼女に向かって僕は続ける。

「ほら、今はどうしたいの、言ってみなよ」

彼女はしばらくの間無言だった。したいことを考えているのだろうか、それとも怒って無言なのだろうか。何分間も無言が続く。僕はじっと彼女を見つめていて、彼女は時々僕をみたり、目を瞑ったりしていた。

「野菜ジュースが飲みたい」

数分間待った後に出てきた答えはそれだった。僕はよく出来ましたの意味をこめて頭を撫でる。彼女の知らない母親という存在に、限りなく近くなれるように。彼女は照れくさそうに、されるがままになっていた。コップと、それと氷を用意しなくちゃいけないな、そう考えながら僕は彼女の頭に乗せていた手で彼女の手を握って、二人で家の中へ入っていった。こんな生活を、彼女の死まで続けていくんだろうという予感がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2930t/

知らない“ひと”の話を

2011年10月9日02時59分発行